

# Principal Correspondence

## 空間認識能力の重要さ

水戸の偕楽園の観梅期間中で、チームラボのパフォーマンスが話題になりました。代表の猪子寿之さんは、ある本に「都会の人は、自然の野山で駆け回ることによって養われる、物体同士の空間的な関係を体験し記憶する能力を失ってしまった。つまりチームラボのパフォーマンスには「空間認識能力」を取り戻してもらいたい狙いがある」と述べています。

以下、猪子さんの主張です。



昔、人は森や山の中に住んでいて、前に進むためには複雑で立体的な地形を乗り越えなければなりませんでした。現代は家や町など平面と直線でできている人工物を作ってその上で暮らし、机上の勉強や、画面など二次元の平面に囲まれて生きています。脳はいつの間にか体を通して世界とつながる感覚を失ってしまったといいます。

今北欧のような先端を行く社会で、その「空間認識能力」を高める教育が模索され、自然と触れ合ったり、山や、森の体験が強調されたりしているのは空間認識に関係する脳の部位や、脳の海馬と言われる部分が、自分の体で、複雑な環境を歩き回り探索することによって発達するからだといわれます。

その「空間認識能力(知能)」ですが、実は創造性や、イノベーションに重要な役割を果たすのです。

リリーバール小学校が体験学習に力を入れる理由はそこにもあるのです。

# Principal Correspondence

## ご褒美の効果

「これができたらご褒美をあげる！」というのは良くご家庭で子どもの行動を促すために使われる手ですが、果たして効果はあるのでしょうか？

行動学者の米国の学者のジョン・リスト氏が、ご褒美の効果を実験で測りました。

- ①最初に20ドル与える ➔ 前回より悪かったら没収。
- ②前回より上がったら ➔ 試験後に20ドル与える。
- ③20ドルを与えるのは ➔ 1か月後。
- ④上がった人には ➔ 3ドルのトロフィーをあげる。
- ⑤何も与えず、ただ励ますだけ。

ご褒美の効果は抜群で100点満点で5～10点以上あがりました。

しかし⑤と③は何の効果もありませんでした。

低学年の子どもには④は効果がありました。

①と②では①の方が高かったと言います。

ご褒美は後であげるより、負けたから取り上げる方が、効果があったのです。



物で釣ってモチベーションをあげるのはけしからんと言われそうですが、教育でご褒美を与えるのは必ずしも「一生懸命勉強するのが楽しい」という気持ちを失わせるわけでもないのです。お金はいかにも米国的ですが、優勝者にトロフィーとか、賞状とかは普通にあります。大人でも頑張ったら自分にご褒美！ということがありますよね！

ご褒美は結果(アウトプット)でなくインプットに。遠い将来ではなく近い将来に与えるのが効果的だということでした。

ご褒美と言えば、ベネッセの調査では、小学生のお小遣いは65パーセントが月1000円以内。教育熱心でしつけを重視する家庭ほどお小遣いの額は低く設定している傾向があるそうです。またお小遣いの額が多い中学生ほどルールを守らない傾向があり、これは子どもが悪いことをした時に子どもを叱らない家庭に多くみられるという結果がありました。参考までに。